

お知らせ

編集長特別寄稿

湖里庵に流れる闇笛の音

高橋 千劍破

◆加賀乙彦作品の朗読劇
 加賀乙彦の「戦争」
 朗読劇『永遠の都』—昭和20年8月—
 第六章「炎都」・第七章「異郷」より
 ○プログラム
 朗読劇「永遠の都」
 演者 山本芳樹 笠原浩夫
 矢代朝子

鼎談 亀山郁夫（名古屋外語大学
 学長・ロシア文学者）沼野
 充義（名古屋外語大学副学
 長・スラヴ文学者）矢代朝
 子（俳優）

日時 令和2年8月15日（土）
 13時配信開始 8月31日終
 り予定

どなたでも、無料でご覧頂けます。
 ○視聴方法

ワールドリ、ベラルアートセンターペー
 ジ <https://www.nufs.ac.jp/library-facilities/wla-center/2020/0815/>
 り、ご確認ください。
 名古屋外語大学ウェブサイト
<https://www.nufs.ac.jp>

◆「会報」の原稿募集

会員の皆様の原稿を募集します。
 1100字（半ページ分）2200字
 （二ページ分）。遠藤周作の人と作品に
 ついて、あるいは遠藤文学との関わり
 についてなど、なんでも結構です。
 なお、原稿は必ず下記「周作クラブ」
 宛てに郵送してください。掲載の際に
 はご連絡差し上げます。

《晩秋の湖面には、ヒドリガモやオ
 ナガガモなどの鴨類や、ユリカモメ
 が飛び交っていた。秋風とともに
 渡ってきた水鳥たちは来春までの半
 年間をこの湖面で過ごす。人の世の
 移ろいをよそに、太古から変わらな
 ずに繰り返されてきた自然界の営みが
 ここにはあった。》

湖面の黄昏は早い。日が翳ると同
 時に夜の帳がおりはじめ、間もなく
 残照を映す水面も水鳥たちも湖岸の
 山も、静かな闇に沈んでいった。

いま、私たちは琵琶湖に面して建
 つ料亭「湖里庵」の一室にいる。灯
 りが消された。闇が部屋を支配した。
 硝子張りの窓から望む湖面が、わず
 かに黄昏の名残りとどめてゆらめ
 いている。その時である、闇の
 静寂を割いて静かに笛の音が流れて
 きた。時に高くまた低く嫋嫋たる音
 色が闇を渡り静寂の中に吸い込まれ
 ていく。

闇笛

本篇『男の一生』の冒頭に登場し、
 最後にまた、主人公前野将右衛門の
 死に際し、人の世の無常の象徴とし
 て、闇の彼方から流れてくる笛の音
 を、私たちはその時、聞いていた。

（中略）

なお、「湖里庵」は、滋賀県マキノ
 町海津の鮒ずしの老舗「魚治」が経
 営する料亭旅館である。この年新し
 く建てかえられ、昨年春（平成元年）

に立ち寄った縁で、遠藤氏が「湖里
 庵」と命名した。昨年春、はじめて
 湖西を訪れた遠藤氏は、湖里庵に近
 い海津大崎に咲き誇る桜花のあまり
 の見事さに息をのんだ。そのときの
 思いが今回の闇笛の夕べにつながっ
 たのである。》

以上は「遠藤周作歴史小説集」の
 第六巻『男の一生』の解説からの抜
 粋である。筆者は小生だ。

この「魚治」にはその後たびたび
 出かけた。周作クラブのツアーで
 行ったこともあるので、憶えておら
 れる方もおられよう。遠藤周作揮毫
 による「湖里庵」の掛け軸が掛けら
 れていた。

なお、鮒ずしは、琵琶湖のゲンゴ
 ロウブナを開いて、桶に敷き並べ、
 酢漬けにした発酵食品である。独特
 の匂い（臭い？）と味があるが、酒
 飲みにとっては絶好の酒肴といえる。
 また、「魚治」では、湖魚の佃煮を
 売っている。モロコなど小魚である
 が、これも酒肴や御飯のおかずにな
 かなかいい。「魚治」は、東京のデ
 パートでたびたび店を開くので、
 我が家の常備おかずのひとつになっ
 ているという訳だ。

なお、海津大崎の見事な桜花は、
 来年も咲くにちがいない。しばらく
 行ってみたいと思う。
 （「湖里庵」は現在再建中です）

＊編集後記＊

▼長梅雨があげたのはいいのですが、連
 日の猛暑にいささか参っております。真
 夏の炎天下を、ランニングシャツ一枚で
 飛び回っていた少年時代を今更乍ら懐か
 しく思い出します。早く大人になりたかつ
 たあのころ、しかし今は喜寿。傘寿を前
 にしてあとのこされた命はどのくらいあ
 るのか、などどつい考えてしまう今日こ
 のごろです。

▼猛暑はともあれ、今、日本列島は、新
 型コロナウイルス騒ぎで大変です。しば
 らくは収まりそうもなく、今年の「周作忌」
 や「遠藤文学原点の旅」なども変更や中
 止を余儀なくせざるを得ない状況です。
 とはいえ、会報はきちんとお届けします
 ので、ご安心を……。

▼さて、長崎の「遠藤周作文学館」では、
 いろいろな新資料や、遠藤先生の素描
 （ヌード）も展示されていてなかなか面白
 そうですね。また、前回紹介した未発表
 小説「影に対して」も、いつ書かれたのか
 その背景についてなど、いろいろ研究が
 進んでいるようです。今後の展開が楽し
 みです。（颯）

「周作クラブ」第80号

2020年8月発行

■発行人 加賀 乙彦

■編集人 高橋千劍破

■副編集人 亀岡 園子

■編集部 一田佳希、大原雄、近藤恭弘、
高木香織、南紀洋子、清水優子

■発行所 東京都世田谷区上馬4-29-17
加藤宗哉事務所内「周作クラブ」

Eメール Shusaku_club@yahoo.co.jp